

氏名(本籍)	内丸裕佳子(愛知県)		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博甲第4207号		
学位授与年月日	平成19年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	形態と統語構造との相関 -テ形節の統語構造を中心に-		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	湯沢質幸
副査	筑波大学教授	Ph. D.(言語学)	竹沢幸一
副査	筑波大学助教授		杉本武
副査	筑波大学助教授		沼田善子
副査	筑波大学講師	博士(言語学)	那須昭夫
副査	獨協大学教授		鈴木英一

論文の内容の要旨

本論文は、従来記述的な研究において従属節に現れるとされてきたテ形節の統語構造を、生成文法の立場から解明することを目的としている。すなわち、テ形節に関する意味用法および生起制約などについては、記述的な観点から既にかなり細部に至るまで研究されてきた。しかしながら、例えば、数ある形態変化の中でなぜある特定の文法環境においてテ形が要求されるのか、また、様々な生起制約は何に起因するのかといった基本的な問いに対して、今なお的確な説明は与えられていない。このような現状を打破すべく、本論文は、新たに生成文法の枠組みを取り入れて、テ形という形態変化とその統語構造との相関関係を解明するとともに、テ形を構築するテそれ自体の機能やテ形に関わるさまざまな現象を統一的に説明しようとするものである。

本論文の主張は次の二点にまとめられる。

- (1) テ形節の統語構造は、VP位置での付加構造とTP位置での等位構造との二つがある。
- (2) テ形節を作るテという形態は、VP位置で付加構造を構築する場合はアスペクトマーカースとして機能する。TP位置で等位構造を作る場合は、時制を伴う等位接続形式として機能する。

「第1章 形態と統語構造との相関-研究の背景および目的-」は、生成文法の観点から形態と統語構造との相関をとらえることの意義を述べつつ、記述的研究における形態変化のとらえ方の限界を指摘する。

「第2章 動詞のテ形を伴う節の統語構造について-付加構造と等位構造との対立を中心に-」は、付帯状況、継起、原因・理由、並列を表す動詞のテ形節を考察対象として、付帯状況を表すテ形節はVP位置で付加構造を構築すること、継起、原因・理由、並列を表すテ形節はTP位置で等位構造を構築することを述べる。加えて、統語構造に対応してテという形態は、付加構造を構築する場合はアスペクトマーカースとして機能し、等位構造を構築する場合は時制を伴う等位接続形式として機能することを指摘する。

「第3章 形容詞・形容動詞の形態『-く(て)』『-で』と統語構造との相関」は、形容詞・形容動詞の「-く」「-くて」「-で」形態を取り上げ、まず、一次述部に現れる形容詞・形容動詞のテ形は等位構造を構築

することを述べる。次いで、動詞「する」の文の分析との関連において、形容詞・形容動詞のテ形が等位接続形式であることを確認する。その後さらに「-くて」「-で」と統語構造との相関や、形容詞・形容動詞のテ形の意味や用法等々の検討を重ね、最終的には、第2章での主張が形容詞・形容動詞のテ形にも適用できることを主張する。

「第4章『名詞+で』の統語構造-付帯状況、原因・理由、並列を表す場合」は、付帯状況、原因・理由、並列を表す「名詞+で」文を考察対象として、前章と同様、第2章での主張は「名詞+で」にも適用可能であることを論証する。すなわち、付帯状況、原因・理由、並列を表す「名詞+で」について、原因・理由を表す「名詞+で」は本論文で扱うべきテ形節ではないこと、並列を表す「名詞+で」こそ本論文で取り上げるべきものであることを述べる。次いで、原因・理由を表す「名詞+で」のデはコピュラではなく後置詞であること、並列を表す「名詞+で」のデは時制とコピュラを伴う等位接続形式であり、TP位置で等位構造を構築することなどを明らかにする。最後に、以上の検討を踏まえて、付帯状況を表す「名詞+で」のデはVP位置において付加することを指摘するとともに、「名詞+で」の統語構造を提示する。

「第5章 結論-テ形節の形態と統語構造との相関-」は、第2章から第4章までに行った検討の結果をまとめる。そして、そのまとめを踏まえて、先行研究がそれと指摘しながらもそれに対して統一的な説明を加えることができなかった、次の①-④のテ形節の生起制約について、どのような説明が与えられるかを考察し、最後に今後の課題について述べる。

- ①継起、原因・理由、並列用法では、前節と異なる主語が後節に生起できること。
- ②時の副詞は付帯状況には生起できないが、継起、原因・理由、並列用法においては生起できること。
- ③「なくて」は、原因・理由、並列用法でしか生起できないこと。
- ④テ形節に後接する節に否定辞「ない」が現れた場合、その否定の作用域は付帯状況と、継起、原因・理由、並列とにおいて異なること。

審査の結果の要旨

これまでの日本語文法研究は、記述的研究を中心として展開されてきた。その結果、数多くの問題が解決された。しかしながら、記述的研究には限界があるのもまた一方の事実である。このような状況の中で、本論文は、日本語文の構造の解明に不可欠でありながら、いまだ適切な説明が与えられていなかったテ形節の統語構造について、生成文法の立場から考察を加えている。ここに著者の積極果敢な姿勢がうかがわれる。一方、論証は博搜した種々の文例に基づいて丁寧に行われており、推論にも無理がない。したがって、本論文は説得力に富んでいる。特に、テ形節が付加構造と等位構造とに二分されること、そして、それを通してテ形節の統語構造の全体像を明らかにした功績は大きい。ちなみに、既に著者の論考の一部は、必ずしも生成文法が一般的でない現日本語研究界において、完成度が高い研究として高く評価されている。

ただし、テ形節の解明だけが統語構造研究のすべてではない。いわゆる従属文にはいろいろな形式があり、その振る舞いも一様ではない。今後は他の従属節についても生成文法の観点から分析を加え、日本語従属節の統語構造全体を明らかにすることが期待される。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。